

ような術語でつきつめようとした課題との接点が見てとれ、『遠野物語』の真意がそういうところにあつた、ということを思い合わせ

る。

Ⅶ 『遠野物語』の清書から印刷へ』では、本作りという興味深い工程にわけている。最終段階で人名が省かれるなどの揺れを見せつつ、どう印刷本が成立してゆくかをたどつてゆき、ついでⅧ 『遠野物語』の発行』は、例の、遠野のひとたちに読んでほしくない、と柳田が思った理由や、受け取った佐々木喜善の感慨、また『遠野物語』の読者を確認する作業、とつづけられる。

Ⅷ章、Ⅸ章は、興味深い、泉鏡花論、芥川龍之介論であり、本書の締めくくりをなす。『遠野物語』は、藤村の批評、花袋の酷評、そして鏡花の「遠野の奇聞」と、批評があい次ぐ。鏡花には鏡花の反発があり、それに対して柳田が「反論」するのは、類型と地域性とかかわる例の難題で、しかし亡くなったときには深く追悼する。

一方、芥川が「河童」（一九二七年）を書いたのは、純粋に柳田の著述を読んでいた。小説であるにしろ、柳田には、水の童子である神聖さが、すこしくパロディー化され

ていることに、不満が起きないはずはない。石井氏の著書はそのあたりまで丁寧にえがきあげた。

本書を『遠野物語の誕生』という。書物を一般に時代から切り離した論じ方で論じることは、世にひろく行われる傾向にあるけれども、本書はあくまで、『遠野物語』の刊行を、同時代に置いてみる、という態度をつらぬいた。それは聞き書きの開始から、刊行直後までの、二年あまりということになる。その間に「誕生」をくりかえした『遠野物語』を、過不足なくえがいて見せた。

もう一冊の、河出書房新社『図説・遠野物語の世界』は、遠野の民俗写真を撮りつづけてきた、浦田穂一氏の写真によって、遠野のいまにいざなわれる装置を獲得したといえる、必見の書としてひろく読者に提供される。『柳田國男の遠野紀行』『聞き書きから刊行ま

書評

小松和彦編

『記憶する民俗社会』

小池 淳 一

一 本書の主題と構成

で』『遠野物語』の世界』につづいて「遠野の語り部たち」という章がある。佐々木喜善はおよそ六冊の昔話集を出したひとで、そのうちの遠野については『老嫗夜譚』（一九二七年）を最初とする。その口絵に老嫗・江石谷江の写真があつて、初期の、語り手の写真といつてよからう。現代での語り手たちをも写真とともに紹介する。「遠野と民俗学者たち」の章では先駆的な遠野研究者である山下久男らを集成する。

あたらしい『柳田國男全集』第2巻（筑摩書房、一九九七年）によって、うへの初稿本が容易に読まれるようになったことを付記しておかなければならない。

『遠野物語の誕生』若草書房、三三〇〇円、
『図説・遠野物語の世界』河出書房新社、
一八〇〇円

（ふじい・さだかず／東京大学）

本書は「記憶」をキーワードとして編まれた意欲的な伝説研究の書物である。ひとまず

そう言っていだらう。しかしそのように位置づけて問題を矮小化してしまつては見過される可能性を多く含んでいる、そういった書物でもある。

このことは冒頭に配された編者による「たましい」という名の記憶装置―「民俗」という概念をめぐるラフスケッチ―によってよく理解することができる。ここで編者は民俗とそれを研究する営みが、それに向かうものの認識論的な枠組みに規定されていることを確認し、その貧困をまず取り上げる。続いて自身の課題として慰霊という対象を提示し、「たましい」という概念が「記憶装置」として見なせることを述べている。副題にあるように大まかな問題の開陳という趣があるが、それだけに現在の民俗学が直面している課題を率直に述べており、編者の苦闘ぶりがよく伝わってくる文章と言える。

続いて記憶を切り口に口頭の伝承をさまざまな角度から扱う論考が並んでいる。内田忠賢の「そぞろにおそろしく覚えて―近世怪談にみる怪異空間の諸相―」は近世期に刊行された怪異小説をそこに描かれている空間に注目して分析を行ったものである。ここでは従来その存在が意識されながらも、十分に検討

されてこなかった近世怪談に対する民俗学の立場からの研究が、空間に着目することで新しい段階に進むことが可能であることを示しており、果敢な課題の提示が行われている。

こうした視点は、膨大な近世文芸研究の蓄積とどう切り結ぶか、という越境的研究が直面せざるを得ない根底的な問題や「世間話」（五七頁以下に頻出）や論者のいう「伝承」と「伝説」との違い（九二頁）といった術語が包含する意味の検討が丁寧に表示されているわけではないといった問題点、さらには具体的な分析例として七八―七九頁に掲げられた怪談がいわゆる「山伏狐」の類話であることへの評価がない、といった疑問などはらんでいるが、それは論者の学問的立場や一貫して継続されている怪異空間研究の総体を通して理解されるべきものである。評者にとっては九八頁に示された怪異小説と世間話との相互関連―世間話の収集、アレンジが怪異小説を生むとともに、怪異小説の枠組みが実話としての怪談を成立させる場合がある、という指摘が興味深かった。この点からの展開に期待したい。

佐々木高弘の「記憶する（場所）―吉野川流域の「首切れ馬」伝説をめぐる―」も筆

者が多様な視点から検討を行ってきた徳島県吉野川下流域の「首切れ馬」伝説を地理学における（場所のセンス）を手がかりとしてさらなる分析を加えたものである。ここでは民俗知識を手引きとして空間を読みとるという態度が紹介され、「首切れ馬」がどのような場所において語られ、どのようなメッセージをはらんでいるのかについて解析が行われる。かつての民俗学的な空間論（宮田登の『妖怪の民俗学』などが想起される）と比べて遙かに綿密であるとともに、伝説をはじめとする民俗文化のなかに口頭表現を（場所）の視点から新たに読みとる重要性を提示している。

これは近世以来の長期間にわたる伝説の生成過程に関する論考であるから、とりわけ史料の援用、検討に関しては慎重さが求められるだろう。なかでも一一二―一一九頁における馬の二分を藍作人層の困窮を示す文書の内容と贈与交換とをからませて理解しようという点はややや性急さが感じられる。また一二七―一二九頁に掲げられた藍商の盛衰伝説が「大歳の客」型に属することに言及しないことも伝説と民俗学が蓄積してきた話型研究との連続及び活用という面からは物足りなさが

残るようにも思われる。そうした小さな問題が感じられるものの、それでも結論に近い、一四六―一四七頁におけるコスモス創成に関する議論は、この視点に基づく研究の広がりや期待させるに足る切れ味のよい主張であることは動かないだろう。ここには新しい伝説の空間形成史研究の可能性が提示されていると受け止めたい。

斉藤純の「記憶の変貌―魚見石の伝説から―」も一種の伝説形成論として読むことができる論考である。奈良県東吉野村の高見川岸の魚見石にまつわる神武天皇伝説が「焼魚蘇生譚」を原像としていることを指摘し、さらにそれからこの伝説の主人公が、神武天皇として定着していく経緯を郷土史家の活動に注目し、復元を試みている。伝説の近代化の問題であり、口頭伝承の持つ合理化という性質を見据えたものでもあり、斉藤の一連の伝説研究の系譜につながるものといえる。近現代の伝説の変容に郷土史や近代的メディアあるいは知識人の関与を見出そうとする論考は最近少なくないが、ここでの検討は、国家による検証や近代の国家神道の制度といった大きな枠組みをしっかりと捉えながらも、それが伝承とその周辺に与えた影響も丁寧に汲み

上げて俎上に載せている点に類似の論考と異なった目配りの良さが感じられる。民俗学において新しい発見であるかのようにみえる文字や近代といった問題設定は隣接の諸学においては決して斬新なものではない。そのことを筆者はよく心得て、民俗研究の分担すべき領域を確実に押さえているのである。

ただ、神武天皇の伝説を考える際には多くの天皇伝説と比較しながら論を進めることで、この天皇伝説の特徴が浮かび上がるであろうと思われるし、多用される「異伝」という語（一五九頁以下）も定義を改めて行う必要が感じられるが、それらはこの論考の本来の目的とはいささか異なるものなせいであろう。この論考はそうした発展的に包含していくであろう領域を予想させる良質の思索が提示されており、それによって、記憶の重要な一部分であり、結晶体でもある伝説の变成を考える際の教科書のような作品となっているといえよう。

梅野光興による「解釈の技法・記憶の技法―高知県大豊町の蛇淵伝説―」は蛇をめぐるこの地域の伝説の生成の場だけではなく、それがどのような民俗事象を素材として編み上げられていくのかを探っている点に特徴があ

る。興味深いのは生成の場、契機となる事象として太夫による託宣（「タク」）が存在することであり、それらが娯楽性を帯びていたことが指摘されている（二〇八頁）点である。これは伝承の初発に共同体の境界に位置する巫者を想定してきた従来の研究（例えば小松和彦の「悪霊論」など）を一步進める指摘であろう。ここから伝説の観客論、聞き手論が構想され得るのである。筆者はさらに、この論考で「伝説の創造」という語を用いて伝説の編成と機能について「過去から虚構のへ物語」を呼び出し、それによって、当事者の現実を一編の「物語」としてつむぎあげていく活動だとしている（二二二頁）。これは伝説研究の近年の動向をよく消化し、練り上げられた新しい解釈ということができる。

なお、筆者は本書全体と同じタイトルの論考を既に発表しており（『大阪大学日本学報』一〇号、一九九二）、その先駆性は高く評価されるべきである。ただし、本書のまとめに示されているような伝説を解釈と記憶の連鎖であるとする過程の表示（二二四―二二五頁）はやや大まかに過ぎるだろう。この視点と見解とに基づき、さらに幾つかの論考が書かれべきであり、筆者にはその充分な用意があ

ると期待させられるのである。

以上の論考群がいずれも地域を舞台に伝説を見つめ、あるいは地域社会の動きや志向をあぶり出す傾向があったのに対して、橋弘文の「無法者とその身体―竹本長十郎の伝承を中心として―」は、伝説のもう一つの宿りの場である身体を主題化しようとしている点が重要である。ここでは近代に起きた膏取り一揆の主導者であった竹本長十郎という侠客をめぐる伝承とその分析、さらに同じ四国徳島の剣客、佐藤兵馬の伝承との比較が行われている。ここでは身体こそが記憶の場所なのであった。そして無法者という概念を用いて、そこに登場する力や振る舞い、服装や心情を叙述している。民俗社会研究という枠組みにとらわれず、かえってそれをゆるがす個性に焦点を当てて分析が行われている点はユニークであり、新たな展開が予想される。

代化やそれに対する反動としてこうした身体のありようを語りながらも、その意義に対して懐疑的であるようなニュアンスが感じられるのもそれ故ではないかと思われる。佐藤兵馬と子孫の身体にまつわる伝承が徳島から北海道へと背景を移す（二五四―二五五頁、二五九頁）ことは、村落社会の居場所を失ったというよりも村落を超える力を身体の伝承がはらんでいた、と解釈できないだろうか。とはいくものの、この論文でこの論集が閉じられることは、伝承のありかが、あいも変わらぬムラという先験的な共同体ばかりではない、ということに気づかせてくれる点でも意義深いものということができらるだろう。

二 記憶という問い、新たな地平

本書はあとがきで編者が各論考の位置づけを行っているが、ここではそこでの見解に囚われずに評者の読解と問題点、疑問点の提示を試みた。あとは伝説をはじめとする口承文芸研究に志を抱く読者ひとりひとりが、それぞれの問題関心に拠りながらこれらの論考に対峙すればよいと思われる。ただし、本書のタイトルに掲げられた「記憶」という主題に

ついてはさらに若干の考察を加えておいた方がよいように思われる。そしてそのことが本稿の冒頭で注意したように、本書を伝説研究という遇し方にとどめられない可能性を持っていることの検証へとつながるであろう。

民俗研究の新しい問題としての「記憶」は、本書に集められた論考群によって、一定の達成と可能性の登録とを済ませたように思われる。しかし本書のタイトルに掲げられた「記憶」と「民俗社会」との関わりという問題についてはいささかの限定を行ってしまっている。既に重信幸彦が指摘しているように「記憶を文化の中核にすえた社会」（二七〇頁）として「民俗社会」を措定することは、方法としての「記憶」に対する自覚を閉ざす危険性がある（重信幸彦「序として へ口承」研究の地平」『へ口承』研究の地平』、二〇〇一、一〇―一三頁）。また「記憶」や「語り」については本書とは異なつた心理学からの果敢なアプローチも既に存在する（佐々木正人編『想起のフィールド』、一九九六、新曜社）。まず問われなくてはならないのは、そうした方法としての「記憶」がいかなる文脈から導かれ、かつ「歴史」という問いとどのような距離があるのか、ということを確認すること

だろう。

我々にとって必要なのは結論ではなく、柔軟な視座が生まれてくるプロセスとそのシテムなのである。本書で編者である小松和彦が紹介しているP・ノラが「記憶と歴史はさまざまに―記憶の場に向けて―」(『思想』九一一号、二〇〇〇、岩波書店)において主張しているのは「記憶」の問題はあくまでも「歴史」との関係において浮上してきたものであることであり、「記憶」は従来の「歴史」を相対化するのであり、そのことは「歴史」を全く異なる位相に棚上げするのではなく、「歴史」そのものを構成しているさまざまな表象を自覚することとつながっている。そしてそうした営みを支えているのは史学史という歴史学の内省であり、さらには記憶の伝統の喪失である。とすれば、我々の口承文芸研究もこうした前提から問い直しをはじめなければならぬ。

我が国の口承文芸研究史は、さらに民俗学史は、いかなる偏向と制約とに依存して展開してきたものであるか、主題化されにくかったテーマとその理由は何か、が問われるべきだろう。そこにはフランスにおける表象を問おうとする歴史とは異なる課題が見出される

だろう。それは「場」や「過去との関わり方」といったよく似た表現に落ち着くのかもしいが、内実としては、遙かに堅牢なものになるだろう。

さらにノラの主張で耳を傾けておかねばならないのは、「記憶」を正当化するものとして「歴史」と並んで「文学」を取り上げていることである。我々の口頭伝承研究が柳田国男以来、口承文芸と名乗ってきたことは、こうした指摘を引き受けて、自前で再考していかねばならない。あくまでも「口承」文芸であることにこだわること、それとも、「口承」を冠したときに、文芸(文学)もまた異なったものへと転生しているのか、そのことは自明で論じるほどのことではなかったのか、どうか、改めて自覚し、問い直さねばならぬ。その点では本書全体が提起しているさまざま「記憶」のありようは、文芸そのものの意義や機能、あるいは文芸という方向性のなかで伝説を理解しようとしてきた従来の営みなどを改めて民俗学的に検討、分析し直していく必要とその方法の錬磨とが急務であることを感じさせるものになっているといえよう。もちろんこのことは「歴史」からの逃避や「歴史」に対するアレルギーでは全く、ない。

今日の民俗学界に「歴史」に対する抵抗が潜んでいるかのように言挙げし、柳田国男以降の歩みを自己の視野狭窄に基づき、なかったかのようにして葬ろうとする言説(『環』創刊号、二〇〇〇、藤原書店)における赤坂憲雄の発言)には異議を申し立てなければならぬだろう。民俗学における歴史の問い方の実践の数々とその今日的読み直しや、戦後日本史の総括に大勢がとどまる日本史の特殊事情(例外として成田龍一「歴史学のスタイル―史学史とその周辺―」、二〇〇一、校倉書房)との対峙は、「日本」にこだわる民俗学とは位相の異なった問題分析と処理とが必要なのである。

本書は一部の論考を除いて、いずれも成稿から若干の時間の推移があるため、各論者の問題意識はさらに先に進んでおり、本書に収載されたものだけではその研究の進展を探るには不十分な面も少なくない。しかし、それは時に入手しやうい書物の形態にのみ研究の最前線があるかのように思いこみがちな我々にとって研究の発展を追いかけ、その過程を幾人かの研究者とその視点とに基づいて追体験していく愉しみを残してくれているということもできよう。そういった意味で本書は、

民俗学の新たな展開の流れに身を投じる絶好のアクセスポイントということができるだけだろう。味読と追跡とをお勧めする次第である。

(人文書院、二〇〇〇年九月刊、二四〇〇円＋税)
(こいけ・じゅんいち／愛知県立大学)

書評

金賛會著

『本地物語の比較研究―日本と韓国の伝承から』

依田 千百子

本書は一九九四年立命館大学大学院へ提出した著者の論文、「日・韓本地物語の比較研究」をもとに、その後学会誌に発表した数篇の論文を加えて成ったものである。著者金賛會氏は韓国公州生れ。韓国韓南大学校大学院日語日文学科修了後、一九九〇年に来日し、立命館大学大学院において福田晃教授の薫陶のもとに研鑽を積み、現在立命館アジア太平洋大学助教の職にある新進気鋭の研究者である。著者は平家物語の研究を志して来日したが、著者の立場を活かした研究、著者だけができる研究分野を開拓してはどうかという福田教授の助言により、韓国の本解「沈清クッ」と日本の本地物語「竹生島の本地」の比較研究を始めることになったという。これが

本書成立の端緒である。評者も八〇年代初め韓国の本解と日本の中世神話の比較研究を志したが、韓国語の巫歌という特殊な言葉の壁につき当り、本格的な研究は若い韓国人研究者に託さざるを得なかった。そして約二十年後、遂に大望の研究が、金氏のこの大著となつて世に出たのであった。真に渴望の書といえよう。

本書は全九章（九篇の論文）と初出一覧、あとがき、索引から成り、総頁数四五三頁の大冊である。本書は第一章を除き、各章とも本解の韓国における諸伝承の紹介、諸本間の異同、本解と日本の本地物語の比較という構成をとっているが、執筆スタイルは指導教授の福田流を踏襲して、詳細かつ緻密な分析と検討がなされており、読みごたえのある濃密

な内容となっている。

第一章本地物語の比較研究序説―日本と韓国では、「日本の本地物語と韓国の本解」とは、きわめて類似した叙述構成をみせるものであり、いずれも異常出生の主人公の遍歴苦難を主題として語るものであつて、両者の間には直接的・間接的にきわめて緊密な関係がある。勿論、韓国の現在の祭文をもつて、日本中世の本地物語と直接比較することは相当乱暴な方法と言わねばならない。というのは、韓国の現在の巫覡の伝承と日本の中世のそれとは、時間的・空間的隔たりと伝承世界の相違があるからである。しかし、日本の本地物語に先行してこうした巫祖祭文や巫覡祭文が存在したとするならば、本地物語と本解との比較はきわめて有意義な研究であると考え「と、研究の意義を述べている。韓国の本解と日本の中世神話との比較研究の先行論文として評者の八五年の論文を挙げているが、この論文は、実はすでに八三年に韓国で出版された、김찬회崔正如博士頌寿記念『民族語文論叢』（啓明大学校出版部発行）に発表したものである。韓国の出版物に載った拙論が、韓国人である著者の目に触れなかったことは残念である。